

留学生と日本人学生との協働による 地元貢献活動の国際化の試み

班員

- 代表取組者 高雄元晴（情報理工学部情報科学科）
共同取組者 尾関智子（情報理工学部情報科学科）
共同取組者 斉木ゆかり（国際教育センター）
共同取組者 西山友恵（国際教育センター）

目次

第1章 総論

- 1：はじめに P3
- 2：地域伝統文化継承における問題点 P3
- 3：留学生に対する日本語・日本文化教育における地域貢献活動のメリット P5
- 4：本プロジェクトの取り組みの概要 P6

第2章 各論

- 1：神輿渡御イベントにおける本学学生の地域貢献（高雄） P8
- 2：国際フェア日本ブースにおける神輿展示と地域貢献活動の広報（高雄） P14
- 3：神輿渡御をテーマにした留学生による劇上演について（斉木） P16
- 4：神輿渡御をテーマにした留学生による劇上演について（西山） P18
- 5：IT技術による地域貢献と安心安全な神輿渡御（尾関） P21

第3章 今後の地域貢献活動の展望 P24

付録 国際学会発表記録

第1章 総論

1：はじめに

日本の地域文化の中で、神輿渡御は宗教的な意義を越えて年長者から若者への教育の場、そして若者が新しい技術と見識を導入することを通じて地域社会を進化させる場として古来から機能してきた。しかし、地域の都市化にともない神輿渡御のこれらの機能は急速に喪失されつつある。これは神輿渡御に関わる集団の高齢化と固定化、本来新たに参加することが期待される若者集団の減少と地域社会からの分離が主な要因である。本プロジェクトは、若者集団として留学生を含む本学学生が地域文化に参加し、学ぶとともに、大学で学んだITやそれぞれの母国語の言語による広報活動を通じ、世界に向けて情報発信をすることを目標にさまざまな取り組みを行ってきた。

2：地域伝統文化継承における問題点

東海大学湘南校舎が位置する神奈川県湘南地域は全国的に神輿渡御（神輿でパレードすること）が盛んなことで知られる。特に関東では、東京神田地域を中心にいわゆる「江戸前神輿」と湘南地域の「どっこい神輿」は双璧をならべる名物であるといえる。江戸前神輿はりん木いわゆる担ぎ棒を4本、神輿本体で交差させ、大勢の担手で渡御できるようになっている。一方、どっこい神輿は二本のりん木を前後に通す全国的に多く見られるスタイルをとっている。どっこい神輿は掛け声を「どっこい」と掛けることから名づけられており、掛け声をかける際には、上下に大きく揺らすことを特徴としている。

湘南地域の神輿渡御のスタイルは地区により大きく異なり、民俗学的にも貴重である。たとえば藤沢市の海沿いの団体は神輿を担いだ状態で肩まで海に入ることでも有名で、毎年多くの観光客とを集めるとともに各局のニュース番組でも取り上げられている。また、小田原市内のある団体は、非常に重い神輿を担いで100mを全速力でダッシュすることを繰り返すという渡御のスタイルをとっている。神輿は神様が乗る乗り物であり、計量することは非常に失礼なことに当たると考えられているため、正確な重さはわからない。おそらく4～500kgあると推定される。東海大学が位置する平塚市のとなりの大磯町の団体においては、急峻な山を重い神輿を担いで登るという慣わしを有している。

本プロジェクトが運営に協力している秦野市今泉神社神輿保存会は今泉神社に本拠地を置き、4月に行われる今泉神社の例大祭をはじめとして、様々な神輿渡御イベントに参加するとともに、今泉神社における各種奉仕活動を行っている。今泉神社は、小田急小田原線秦野駅から西に1kmに位置している中小規模の神社である。同神社の歴史は古く長禄年間（1457～1461年）に長野の諏訪大社から分祀したことを始まりとされている。その後近隣の神社との合祀を経て現在にいたっており、氏神として近隣住民からの篤い信仰を受けている。今泉神社における神輿渡御はいつごろ行われるようになったのか定かではないものの、昭和年間に一時その伝統は途絶えてしまった。その後、地元有志の方々が年少の頃に

見た今泉地域における神輿渡御の様子を思い返したり、地区の古老に聞き取り調査を行うなどして復活させた歴史を有する。現在、今泉神社神輿保存会は神社が所有する神輿および泉神社神輿保存会の合計 2 基を有し、湘南地域でも非常にアクティブに活躍していることで知られるくらい発展している。

例年、4月の第1日曜日に行われる今泉神社例大祭における神輿渡御は、秦野市内でも最大級のものである。秦野駅から近いこともあり外国人を含む多くの観光客を集め、秦野市における観光資源としても重要なもののひとつとして数えられる。今泉神社神輿保存会の神輿渡御のスタイルは典型的な「どっこい神輿」である一方で、夜間は神輿の周りに多くの伝統的なちょうちんを設置し、その中にろうそくを灯して渡御を行っている（図1）。他地域においては、上下に神輿本体を揺らす際に高価なちょうちんが燃えてしまうことから忌避されることが多いが、神輿渡御の美しさへのこだわりからこのようなスタイルにこだわっている。この点でも、観光資源としての評価が高い。



図1 夜間における神輿へのちょうちん点灯の様子（2015年4月撮影）

しかしながら、今泉神社神輿保存会は湘南地域の他の神輿団体と同様、会員の高齢化により、近い将来の活動の停止が危惧されている。そのため、各団体とも以前は地元の氏子に限っていた会員を一般の方々からも募るようになってきているものの、十分な成果があがっ

ているとは言いがたい。実際に、ほとんどの神輿団体は会員だけの神輿渡御の実施は不可能であり、これらの団体は、関東および近隣県にまたがる広域に存在する多くの神輿団体と有効団体組織を形成し、おのおの自団体のイベントの際はホスト役に徹し、担ぎ手は多くの友好団体の会員が手分けして担当するという体制をとって、相互扶助的になんとかそれぞれの地域の神輿渡御を行っているのが現状であるといわざるをえない。

今後、神輿団体の高齢化にともなう活動の不活性化と会員の減少は湘南地域における個性豊かな神輿渡御の伝統の消滅を意味する。また、地域の神輿渡御の伝統や渡御のノウハウを知る高齢会員の死去にともない、将来、神輿渡御の伝統を復活させようとしても、もはや不可能になることも容易に想像できる。いわば、神輿団体の支援は文化・伝統保護の観点で早急な対応が必要な課題といわざるをえない。このような状況を解決しようと、一昨年トコラボ採択課題として本プロジェクトを開始した。

秦野市を含む湘南校舎近隣地域にとって、東海大学学生は本来コミュニティーの一員である。実際、これらの地域に多くの一人暮らしの学生たちがアパートや学生寮に居住しているのみならず、自宅通学生も、秦野市に位置する最寄の小田急小田原線東海大学前駅を利用し、地方公共団体が整備した道路を歩いて通学し学んでいる。しかしながら、地域住民と東海大学学生の接点はほとんどなく、地域住民にとって東海大学学生は学生生活のために数年間を過ごすだけの存在であり、学生も地域住民の一員として参加する機会はほとんどない。

そこで、本プロジェクトでは東海大学生を、地域の貴重な伝統文化である神輿渡御を通じて、自らが地域のコミュニティーの一員として地域を支えるという意識を醸成することをテーマとして提案した。また同時に、大学の中で学ぶ機会が乏しい社会人としてのマナー、常識、仕事の段取り、チームワークそしてリーダーシップを地域の方々から体験的に学ばせていただくという双方向的な学びの機会を学生に提供することも可能である。いわば、地位の中で失われていっている若者集団を東海大学生が置換し、地域の伝統文化を支える担い手の一員として地域の中で位置づけていただくことにより、東海大学と学生に対する信頼を得ることにつながるものと信じている。

3：留学生に対する日本語・日本文化教育における地域貢献活動のメリット

東海大学では主として日本語別科が中心になって、日本語の習得と日本文化理解のためにさまざまなカリキュラムを提供するとともに、日本語スピーチコンテストや国際フェアなどユニークなイベントを開催している。一方で、本プロジェクトが目指すような近隣地域の伝統文化や方言・習慣等をボランティアを通じて学ぶ教育・社会的取り組みを行っている例は全国的にもないといっても良い。

秦野市は、各コミュニティーで催される神輿渡御に加えて、道祖神や天神社といった石を介した宗教文化が市内全域に残っており、日本の宗教文化を理解する上でも貴重である。また、道祖神をばらばらに壊したものを子供たちが地域住民に売り歩く一方で回収し、再

び元に戻す石売りという全国的にも珍しい風習も存在する。この宗教的由来は不明ながら、神聖な石像を破壊するという忌まわしい行為とその再生を、地域コミュニティーの将来の担い手である子供が同時に行うという行為は社会学的にも大変興味深い。

秦野市は言語的に、秦野弁といわれる愛らしく独特の美しいイントネーションを伴う方言が今なお年長者によって話されている。留学生たちはクラスや教材から触れる標準語、キャンパスやアルバイト先で触れる学生・若者言葉（ごく短期間だけ話され、いずれ新しいものに置き換わる）やテレビの中で語られるステレオタイプ化された大阪弁（上方のお笑い芸人たちが使う人工言語的な方言）や京都弁（舞妓が使うような閉ざされた社会でのみ話される方言）にしか接する機会をもたない。留学生が地域のコミュニティーに積極的に参加し、地域コミュニティーの中で生活者が話す生きた方言に触れることは、日本の豊かな言語文化を理解する上でまたとない機会であるといえる。

また、一方で地域コミュニティーの方々にとっても、留学生が参加することによって外国人と彼らの文化に触れるまたとない機会になるといえる。いわば留学生も日本人学生と同様に地域貢献に参加することを通じて、東海大学に対する信頼とブランド力の向上に寄与するといえる。すなわち、留学生教育、地域貢献、大学のブランド力向上の三位一体の成果が本プロジェクトから得られることが期待される。

4：本プロジェクトの取り組みの概要

昨年度採択課題「地域に学び地域に貢献する情報技術教育システムの構築」（代表：高雄元晴教授）に引き続き、内容を拡充させて本年度の課題に取り組んだ。昨年度は日本人学生を対象に地元神輿団体の振興協力を行ってきたが、本年度は新たに日本における地域伝統文化の理解と日本語学習の促進を期して、留学生にも積極的に参加させる取り組みを行った。また、将来的に本プロジェクトを教員主体でなく学生たちの自主プログラムとして昇華させる試みとして、チャレンジセンター教育プログラムとの連携に取り組んだ。本プログラムで企画した様々なイベントおよび取り組みを以下に紹介する。

- 1) 今泉神社神輿保存会の自主イベントの準備および実施への学生の参加。
- 2) 国際フェア日本ブースにおける神輿の展示と学生たちによる紹介。
- 3) 日本語スピーチコンテストの際、幕間劇として「神輿紹介劇」を留学生たちが企画、上演。
- 4) 留学生有志による「多言語神輿渡御紹介パンフレット」の制作。
- 5) 神輿の広報および神輿渡御の安全確保を目的とした学生たちによるアプリの開発。

上記のプロジェクトを教員のアドバイスを受けながら学生たちが自主的に行い、多くの学びと経験、そして地域貢献に対する認識を得ることができたと信じる。今後、持続可能な形で、学生たちが創意工夫のもと神輿渡御など地域の伝統文化の保護と振興に貢献する

風土を本学の中で醸成して行きたい。また、留学生にとっても伝統文化の保護に自ら進んで取り組むことは、日本語の習熟に役立つだけでなく、教科書や教材では決して知りえない日本文化を体験的に学ぶ機会となる。このような取り組みを通じて将来的にカリキュラムとの連携等を視野に入れてありかたを考えていきたい。

第2章 各論

1：神輿渡御イベントにおける本学学生の地域貢献

2015年度、今泉神社神輿保存会における自主イベントすなわち保存会および神社が所有する神輿を用いた渡御は3回であった。第1回目は4月12日（日曜日）に秦野市内で行われた今泉神社例大祭、第2回目は6月28日（日曜日）に横浜市イセザキモールで行われた横浜開港祭神輿コラボレーション、そして第3回目は10月11日（日曜日）に東京都江東区東京都立木場公園で行われた大江戸神輿祭りであった。第3回目は引率教員の身内に不幸があったため、学生を含め本プロジェクトとしての参加は見合わせたが、第1回および第2回の神輿渡御については教員および留学生を含む学生達が参加し、今泉神社神輿保存会の活動に貢献した。

第1回目の今泉神社例大祭は、約一ヶ月かけて今泉神社神輿保存会会員が神輿の飾り付け、友好団体との交渉、地元各自治会との折衝、そして道路使用許可に関する地元警察との打ち合わせ等、多岐にわたる内容の準備を進め、前日に丸一日かけて最終的な調整を行った。当日は、朝7時に保安上の目的から地元篤志家に一時的に借りている倉庫に集合し、そこから神輿を神社まで約500mの距離を移動させた。決して広くはない今泉神社の境内に近隣自治会が有する子供神輿および太鼓連のトラックがそれぞれ5基、5台が所狭しとなんだ。留学生を含む学生が4名参加したのは朝の8時で、9時からは友好団体の会員約100名を含む例大祭実行者、氏子、一般客が大勢列席する中、神職により祭礼を行った後、約5kmの道のりを11時間にわたって渡御を行った（図2）。途中日没前から、図1に示したように多数の提灯を神輿の周りに配し、揺らぐ蠟燭の炎で大変美しく彩られた神輿が町の中を移動するさまは神輿ファンの中では有名で、関東一円からカメラやビデオを持った観光客が集まっていた。また、蠟燭が灯された状態でも、「どっこい」といわれる神輿を大きく上下に揺らす行為がところどころで行われるため、いくつもの提灯が炎上する姿も祭りの興奮を守り立てていた。

この今泉例大祭において、学生達は前日の準備および当日の実施にいたるまで丸二日間、大いに活躍してくれた。前日の準備においては慣れない作業がほとんどであったにも関わらず、会員の方々から学ばせていただきながら、自ら何をすべきか見極め、適切に行動している彼らの姿はたくましく、会員の方々からも大いに信頼を集めていた。当日の渡御において、今泉神社神輿保存会はホストであるため、学生達はあくまで運営者として大いに活躍してくれた。長時間の渡御の道程でお旅所と呼ばれる休憩場所で、参加者に冷えた御茶や焼酎を配るが、その際は率先して役務を買って出たり、安全安心な神輿渡御の実施のために神輿のコントロール（神輿本体を左右から押したり、りん木すなわち担ぎ棒の先にくくりつけられたロープを前後から引っ張ることにより行う）を適切なタイミングを今泉神社神輿保存会会員から習いながら見計らいながら積極的に実施していた（図3）。また、友好団体会員が交替等で担ぎ手が少なくなった場合には、女子学生であっても自主的に重量物である神輿を担いでいた（図4）。このように学生達が新しいことを熱心に学び、吸収

しようとする姿勢、そして神輿渡御に自主的かつ積極的に活躍しようとする態度に、今泉神社神輿保存会会員方から学生達に大変な信頼を寄せていただいた。



図2 今泉例大祭に参加した東海大学学生たち（2015年4月撮影）



図3 お旅所で飲み物を振舞う東海大学学生たち（2015年4月撮影）



図4 今泉神社例大祭の様子（2015年4月撮影）

第2回目の横浜開港祭神輿コラボレーションは、横浜市イセザキモールで毎年行われている神奈川県最大の神輿イベントである。神奈川全域から18基の神輿が結集するとともに、多くの神輿が数珠つなぎで商店街を行進する様子は、大変勇壮で多くの観光客に加えてテレビ局、新聞社等マスコミの取材もなされている（図5および図6）。



図5 横浜開港祭神輿コラボレーションにおける今泉神社神輿保存会の神輿渡御の様子
(2015年6月撮影)



図6 横浜開港祭神輿コラボレーションにおける今泉神社神輿保存会の神輿渡御の様子
(2015年6月撮影)

前日の準備、当日の準備から実施、撤収、そして今泉神社での神輿の解体作業まで丸2日間、留学生を含む5人の学生たちは、それぞれの役目を自分で見つけながら活躍してくれた(図6)。このイベントにおける学生たちの活躍は今泉神社神輿保存会会員からも大いに評価され、今後のイベントへの参加も個別に要請されていた。事実、他地域で行われる神輿渡御イベントに友好団体会員として積極的に参加するようになった学生もいた。神輿を担ぐのは、友好団体の会員という特別なステータスを有する人物しか許されず、学生が単に地域文化学習の一環として参加しているのではなく、今泉神社神輿保存会の中で大切な若者集団の一員として認識していただいていることを意味していると考えられる。



図6 横浜開港祭神輿コラボレーションに参加した東海大学学生たちおよび教員
(2015年6月撮影)

2：国際フェア日本ブースにおける神輿展示と地域貢献活動の広報

今泉神社で使われている神輿は非常に高価かつ重量物である。したがって、学内における神輿の紹介や学内における神輿渡御の体験・練習のために利用させていただくのは、運搬・安全性を考慮しても難しいといわざるをえない。そこで、我々は、今後のプロジェクトの発展に資するために東海大学オリジナル神輿（東海大学神輿と称する）の製作を提案した。実際の製作にあたって、秦野市内で建設業を営む今泉神社神輿保存会副会長に相談したところ、本学の教育的効果を鑑みて非常に安く引き受けていただけることとなった（図7）。サイズの小さい子供神輿と呼ばれるもので特別な置き場所を必要としないばかりか、軽量で神輿渡御時にも学生の安全を確保できる。その一方、構造、出来栄えについてはかなり本格的で神輿のみならず日本の建築技術や宗教文化を学ぶ上でも格好の教材になると期待される。

12月4日（金曜日）および5日（土曜日）の両日にわたって、国際フェア日本ブースにおいて東海大学神輿の展示を行った。この主たる目的は、本学の留学生や日本人学生に神輿と神輿渡御を理解してもらうとともに興味を持ってもらうことを通じて、今泉神社神輿保存会の活動について積極的に広報することであった。当日は、国際交流に関わるチャレンジセンタープログラムに参加している学生達と共同で実施し、神輿の文化的側面について学生たちが説明をおこなった。また、フェア2日目は学生たちが学内で東海大学神輿を担いで神輿渡御を行ったと聞いている（当日、教員は出張等のため学内におらず、立ち会えなかった。また、学生たちも写真資料も残念ながら残していなかったとのことである）。

今回、チャレンジセンタープログラムと合同で日本ブースにおける展示を行ったことは大きな意義があったと考える。現在、本プロジェクトは教員が主体で行っているが、いずれ学生達が自らの創意、工夫のもと地域の文化保存に向けた取り組みを主体的に行ってくれることを期待している。いわば、本プロジェクトが目指すところはチャレンジセンタープログラムの理念と一致しているといえる。今回の取り組みを通じて、本プロジェクトを将来的にチャレンジセンタープログラムへ昇華していく際のロードマップを描く一助になったと思われる。



図7 東海大学神輿。屋根は未塗装であるが本年度中には専門家の指導のもと漆塗りを施したいと考えている。

3：神輿渡御をテーマにした留学生による劇上演について

国際フェアのイベントのひとつに「留学生によるスピーチコンテスト」がある。今回は2015年12月3日（木曜日）の15:10から16:40に松前記念館講堂で行われた。このスピーチコンテストで審査員らがスピーチの審査を行う間、留学生による演劇を披露した。この演劇は別科日本語研修課程の上級クラスで開講されていた「口頭表現」の授業でプロジェクトワークとして準備したものである。ドラマプロジェクトを授業に取り入れた理由はドラマの構想から練習の中で、独話だけでなく対話能力も身につくと考えたからである。ドラマのテーマはロシア人学生が提案した「津波から戻って来た神輿」の新聞記事をヒントにし、「神輿に乗れない神様」というテーマで劇を作った。まず、学生達が秦野今泉神輿保存会の会員を取材し、脚本、監督、音楽、照明、俳優、小道具等、参加学生全員が何らかの役割を担った。この演劇では実際に作成された神輿を舞台上で使って上演した。

このプロジェクトについての学習者の意識を知るべくアンケートを行った。今回は「満足度」と「プロジェクトの感想」について紹介する。なお（ ）内の国籍は学生の出身国次のアルファベットは学生の名前のイニシャルである。日本語は学生が書いた日本語表記のままである。

満足度

- 100% 皆がちゃんと役を分けて、自分の仕事をさいごまでやってくれ、とてもいい劇になったと思いました。本当に楽しかったです。(韓国 Y)
- 80% 少し名残がある。(韓国 S)
- 90% (韓国 Y)
- 110% 思ったより良く出来たので嬉しいです。お客さんのリアクションを聞いたので皆はよくできたと思います。(ロシア R)
- 100000% 完璧だった。(台湾 S)
- 100%よくできましたから(タイ B)
- 100%よくできた！おもしろかった！すばらしかった♥(台湾 M)
- 97% みんな全員が積極的に参加しなかった気がしますけど、とりあえず最後までできたので楽しかったです。(韓国 D)
- 90% とてもよかったですけど人に「少しみじかいな」と言われました。(韓国 G)
- 100%みんなはよく頑張って演出はすばらしかった。(ロシア A)
- 95%神輿は長くて4人で移動しにくかった。(ロシア M)
- 100%皆本当に頑張りました。すばらしかった。:) (モンゴル S)
- 95% 音楽の小さいミスがあったので、満足までではないです。(デンマーク T)

1名を除き90%以上の満足度を表している。中には100%以上の数値を記入し、達成感があった事を示している。

プロジェクトについて

- 最初はめんどうだと思って嫌々ながら始めていました。でも、最後のリハーサルの時から皆で何かを作ることが出来たと思ったし、どんどん楽しい気持ちに変えました。本当にいい経験で。ずっとこの活動があってほしいです。外国人の皆といっぱい日本語で話せるし、とても誇りになりました。(韓国 I)
- 皆が努力して一つの作品を作っていくのはとてもすばらしいことだと思います。(韓国 S)
- もっと台詞が多い役者をやったらもっと楽しかったかもしれない気がしました。(韓国 Y)
- 今回のドラマの内容を作った人達はとてもすごいと思います。最高だと思います。(台湾 S)
- いいプロジェクトでした。クラスの友だちと仲良くなりました。これからもまたおもしろいドラマを見たいです。(タイ B)
- ドラマプロジェクトはいいと思い、いい監督がいる本当によかった。そして、皆も努力した。お疲れさまでした。先生もありがとうございました♥(台湾 M)
- はい、チームワークについても、舞台上立つ事についても、ゼットイにいい経験になります。(韓国 D)
- 自分で「始めから最後までしなければならない」というところが本当によかったと思います。(韓国 G)
- 授業を多様するために、たいへんおもしろかったです。(ロシア A)
- 最初につまらないと思いましたが、参加してみた後とても気に入った。(ロシア M)
- スピコンのたびにしたほうがいいと思います。(モンゴル S)
- すごくいい経験でした。先生にありがたい気持ちです。(デンマーク T)

プロジェクトの最初の段階では気乗りがしなかった学習者もプロジェクトが進むにつれて、意欲が出てきたようである。学習者に役割を与えることで責任感が生まれ、ドラマ作りをとおして、学習者間の連帯感が増し、更に良いものを作ろうという意欲に繋がったからであると思われる。本物の神輿が舞台上に登場したときは会場から歓声があがった。

今後はさらに神輿を使った日本語の授業の可能性について考えてみたい。

4：留学生有志による「多言語神輿渡御紹介パンフレット」の制作

本学には、36の国と地域から約650名の留学生が在籍し、それぞれ別科日本語研修課程（以下 別科）、学部、大学院で学んでいる。

別科では、日本語の授業の一部として「みんなの文化」という授業を行っている。ここでの「文化」は、伝統的な日本文化だけを意味するのではなく、自国の文化や日本で見つけた文化なども含んでいる。授業は、毎週1つのテーマに沿って授業支援の学生と対話しながら、互いの文化への理解を深めることを目指している。日本文化のほか、クラスメートの文化への理解と自国文化が日本語で発信できることが授業の目的である。

別科での「多言語神輿渡御紹介パンフレット」作成プロジェクトは、10月26日（月）の別科4クラスの文化の授業の一部で本プロジェクトを紹介し、翻訳協力を求めた。この日の授業は、建学祭前の週にあたるため、翌週から行われる建学祭を導入とし、展開した。翻訳プロジェクトの活動に繋げるために表1の手順で授業を進めた。

表1 「みんなの文化」授業の流れ

導入活動	日本の各大学で開催されるいわゆる「学祭」は自国にあるか あるとしたらどのくらいの規模か、 どのようなことをするのか、などについて話した。
展開 「神輿」に話題を繋げるために	① 全体活動 『日本語教育用写真パネル（祭り）』写真クイズ ② グループ活動 『できる日本語 初中級 わたしのことばノート（お祭り）』語彙の確認 ③ 全体活動 神輿渡御の動画を視聴、祭り特有の音楽や声などを取り上げた。
本活動	本プロジェクトの概要説明後、翻訳のもととなる日本語の説明をした。

母語への翻訳は、別科4クラス（中級レベル）の学生にとって、初めての経験となった。作成に際し、まず、翻訳の元となる日本語の文章の読解を行った。元の日本語の文章はできるだけ簡潔、且つ平易な文章になるよう工夫されていたため、省略された語の説明、未習語・未習文型について、教師が説明を加えた。

翻訳の元となる日本語の文章

<p>ねんいじょう 以上、1300年にわたって日本人に親しまれているまつりです。たくさんの方が ぼう さき 棒で支えられた小さな神社をもって町をパレードします。</p> <p>みこしパレードをする理由にはいろいろな説があります。たとえば、日本の神々が町の かみがみ ちから かんせんしょう なお あくま お はら ようすや人々のくらしを見るためとか、神々の力で感染症を治したり、悪魔を追い払う ためなどです。</p> <p>げんざい しかし、現在では、宗教的な雰囲気の中で、みんなで力を合わせ、大声を出して楽 いちばん もくてき じゅんぴ さんか み たの まつ にほん しむのが一番の目的です。準備するのも、参加するのも、見るのも楽しい祭りです。日本 しゅうきょう しん ひと さんか の宗教を信じていない人でも参加できます。</p>
--

翻訳原稿は、建学祭期間中にメールで提出することとし、ベトナム語、タイ語、ドイツ語の 3 言語の翻訳案の提出があった。提出された翻訳原稿は、配布することが念頭にあったため、各言語ネイティブチェックをお願いすることにした。ネイティブチェックは、タイ語は別科出身の学部生に、ベトナム語は同じく別科出身の大学院生に、アラビア語についてはアラビア語が母語の教員に協力を得た。また、ドイツ語に関しては、一人の学生が初稿を担当し、別の学生が推敲するという方法をとった。



図 8 完成した多言語神輿渡御紹介パンフレット

以下に、翻訳に参加した学生の声と翻訳チェックを担当した学部生を紹介する。

翻訳に参加した別科生の声

(ベトナム語)

自分たちの専門の勉強以外で日本語をベトナム語に翻訳することはありましたが、専門外の翻訳をするのは初めての経験でした。知らない言葉がたくさんありましたが、辞書を使ってがんばってやってみました。

翻訳チェックを担当した学部生の声

(タイ語)

2つあった翻訳案のいい部分を選んで完成させました。きれいなことばや表現になるように工夫しました。普段、日本語で授業を聞いたり研究したりしているので、タイ語に翻訳することが新鮮でした。

今回「多言語神輿渡御紹介パンフレット」は、日本語、英語、ベトナム語、アラビア語、ドイツ語、タイ語の 6 言語で作成することができた。それぞれ文字の異なる言語であり、視覚的にも国際色が感じられるものになった。パンフレットは、自国の言語がない場合も辞書など使って日本語が読めるよう、漢字の上にルビをつける配慮をしている。また、本プロジェクトの問い合わせ先も日本語だけでなく、英語を併記し、誰もが本プロジェクトにアクセスできるようになっている。印刷した 500 部は、第 2 章 2 節で報告した第 10 回国際フェアの日本ブース「東海大学神輿 (図 7 参照)」の説明として、神輿展示の際に活用し

たい。

今年度作成した「多言語神輿渡御紹介パンフレット」が手に取って下さった方々と「神輿」に関心を持った留学生の異文化理解の一助になれば幸いである。また、この取り組みが今後の留学生と日本人学生との協働につながることを期待している。

5. IT 技術による地域貢献と安心安全な神輿渡御

大学院生 9 名（うち留学生 5 名）、学部 4 年生 13 名が班に分かれ、地域の若者が神輿渡御に興味を持つように、また安心安全な神輿渡御を行えるように、卒業研究などを通して身につけた IT 技術をもとにプロジェクトに参加した。①AR・動画班、②Twitter 班、③位置情報班、④ホームページ班、⑤ゲーミフィケーション班、⑥セキュリティ班、⑦多言語班からなる。以下に、それぞれのプロジェクトの概要と成果について述べる。

① AR・動画班

AR（拡張現実）により神輿を盛り上げるアプリの開発を行った。第 2 章 4 節で作成した神輿紹介パンフレット上のトコラボのロゴに Android 端末をかざすと神輿動画が再生される。再生される動画はテスト用に用意したものであり、今後実際の神輿渡御を撮影し完成させていきたい。また、本研究室の学生は動画の撮影に対する専門知識がないため、広報関係の学科の学生と共同で開発していきたい。



② Twitter 班

Twitter Bot を利用し、神輿・祭り情報の定期ポストを行うシステムを開発した。行事の予定などをあらかじめ登録しておくことで Bot が定期的に行事をツイートしてくれる。神輿行事を定期的に Twitter に投稿することは若者の神輿への参加を促すのに有効である一方、広報担当者の負担がかかる。本システムを利用することで担当者の負担を軽減しながら神輿の広報をすることができる。

③ 位置情報班

Arduino により GPS 神輿追跡システムの開発を行った。Arduino の基盤を組み立て、GPS 情報の取得まで達成することができた。GPS 情報をサーバーに発信する方法を検討中である。さらに、GPS 情報をサーバーに発信することができたと仮定し、神輿の位置を地図上に配置するソフトを完成させることはできた。神輿とユーザの位置を地図上に表示し経路探索させることもできた。

神輿が近づくと時計型携帯端末 (AndroidWear) が振動するシステムも計画していたが、神輿と AndroidWear の距離情報を Bluetooth により取得することが技術的に難しく、完成させることができなかった。



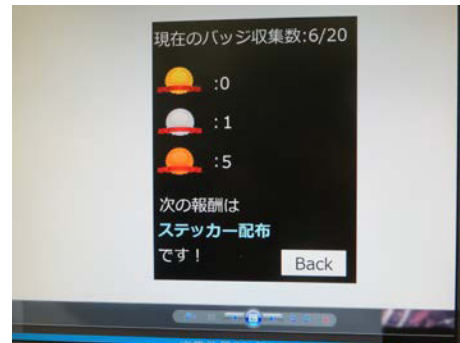
④ ホームページ班



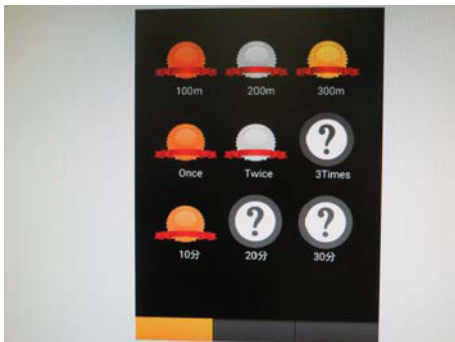
②と③で得られた情報をホームページ上に載せる準備はできた。しかし、ホームページのデザインなどは得意とする学生がおらず、広報やデザインを専門とする学生と共同で開発することが望ましいと感じた。

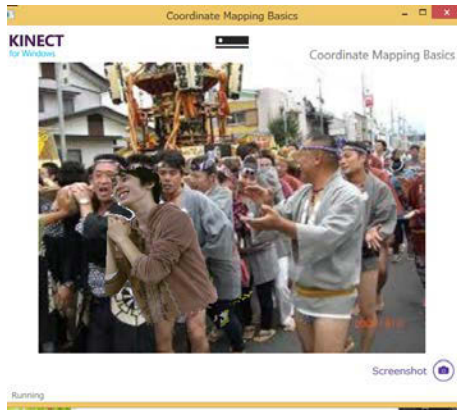
⑤ ゲーミフィケーション班

ゲーミフィケーションとは、ゲームそのものの開発ではなく、さまざまなタスクにゲーム的な要素を取り入れ、タスクに対するモチベーションを上げるものである。本プロジェクトでは、神輿に参加するとアイコンバッジがもらえるアプリを開発した。現代の若者はアプリ上でアイテムを集めることに強い興味を示す。アイコンバッジを集めることで神輿に参加する意欲



を引き出そうとするものである。ソフト的には完成しているが、文系の学生などと協力しコンテンツをさらに充実させることができるのではないかと考える。





Kinect による神輿体験システムも作成した。現在のままでは合成画像の不自然さが残るため、技術的な改良が必要である。オープンキャンパスなどのデモに用いるには不十分であるが、今後の改善を期待したい。

⑥ セキュリティ班

セキュリティ班は上記のアプリやシステムの安全性について検討し、セキュリティの観点からそれぞれの班に助言を行った。また神輿の動画撮影の際には物理的な安全性などの確保にも努めた。

⑦ 多言語班

多言語班はタイからの留学生 1 名と UAE からの留学生の 4 名からなり、4 節のプロジェクトである多言語対応パンフレットに協力し、アラビア語、タイ語の翻訳をおこなった。

今後の課題

理工系の学生は卒研や修論が忙しく、プロジェクトに時間を割くことができないのが現状である。学生たちは、はじめ乗り気ではなかったが、卒業研究のテーマをもとにすればいいと助言をし、さらにグループで作品を作るよう勧めたところ、楽しんで取り組むことができたようである。しかし、学部生の多くは 1 年で卒業してしまうため、下の学年への引継ぎが難しい。また下の学年は興味を持たないことがある。今後は、研究室だけでなく、研究室未配属の低学年の学生にも声をかけ、プロジェクトを継続させることが必要である。

また、今回アプリやシステムなどはほぼ完成させることができたが、そこに載せるコンテンツは理工系学生が不得意とするところであり、また卒研で忙しくなかなか時間がとれない。広報やデザインを卒論のテーマとする学生と協力し内容を充実させることが必要であると痛感した。

第3章 今後の地域貢献活動の展望

本プロジェクトは、昨年に引き続き2年連続の採択課題となった。昨年度は日本人学生特に情報系の学生を主眼においたテーマ構成であった。一方、本年度、留学生に対する国際教育という観点を導入して、留学生と日本人学生が協働して地域貢献を行う一方で、地域の人々から文化や言葉を学ぶことを目的とした取り組みに範囲を大きく広げた。成果に関しては、各論で詳述されているとおり、研究・教育の両面で大きな成果を挙げたと評価される。

研究発表に関しては、本年度、カナダ・バンクーバー市で行われた The 60th Comparative and International Education Conference (第60回比較国際教育学会)で口頭発表を行い、おおむね好評であった。なお、本学会は国際教育分野において中心的な国際学会であり、研究発表のインパクトが大きい(付録参照)。本プロジェクトは、神輿という日本文化特有の神事を題材にしたものであったが、地域に根ざした祭礼は形は違っても国や文化を超えて普遍的に存在するものである。この意味で、本研究プロジェクトの実施内容や成果は、他の文化圏で同様に行ううえで、先行事例として大いに参考になり得るものである。今後、海外の大学や地方公共団体から問い合わせがあった際は、積極的に情報を提供して行きたいと考えている。

IT技術による地域貢献と安心安全な神輿渡御に関しては、2年越しのプロジェクトで学生達が自らの発想のもと、さまざまなアプリ開発に取り組み、危険な神輿渡御を安全安心なものにかえることができる技術を開発したことは特筆されることである。これまで、このような技術開発がなされたことはなく、本学学生が教育研究を通じて培った知識・技術を応用し、自由闊達な発想の下、おそらく世界初の技術を完成させることができたことは教員として誇ってよいことであると評価される。

また、今泉神社神輿保存会から要望の強い体外的な広報についても、学生達の発想のもと、各論で詳述したように、ゲーム性の高いものやソーシャルネットワークサービスなど、さまざまなIT技術を用いて学生達は自由な発想のもと楽しみながらユーザーが神輿に興味を盛ってくれるような作品を完成させた。一方、留学生たちが多言語神輿渡御紹介冊子を作成・出版するなど幅広い活動を行った。これらの活動を通じて、多くの留学生たちが今泉神社神輿保存会の活動や神輿渡御そのものに興味を持ち、地域文化の保存に貢献してくれることを願っている。また、多言語神輿渡御紹介冊子を通じて、一般の在留外国人や外国人旅行客の中に新たな神輿ファンを獲得することは、地域の活性化にもつながると考えている。

本プロジェクトは、留学生への積極的な関与を通じて、地域貢献に対する国際化と日本文化理解の促進を盛り込んだ最初の年度となった。この取り組みは今後も引き続き行っていく予定である。たとえば本年度製作した東海大学神輿を用いて、今泉神社神輿保存の活動のみならず近隣の神輿団体の活動に参加し、留学生が自主的に地域貢献しやすい環境を

整えることもひとつの方策である。また、近隣市町村の外国人コミュニティーで東海大学神輿を題材にワークショップを行い、神輿渡御を通じた日本文化紹介と神輿団体への参加の呼びかけを留学生と日本人学生がともに行うことも地域貢献のひとつとなると考えられる。このプロジェクトの実施には、本学国際活動系チャレンジセンタープログラムや地域国際友好団体と連携して行うことも、今後の方向性としてありうると考えられる。

将来的に留学生が地域貢献を通じて、日本の地域文化と言葉の理解を体験的に行う取り組みは、大学における将来的な日本語習得カリキュラムに組み込める可能性がある。すなわち、講義の一環としてフィールドワークを留学生たちに課し、その中で自ら地域のコミュニティーに溶け込むよう努力し、一般の日本人から信頼を得て、彼らから地域文化と言葉を学ぶ経験を有することは、決して大学のキャンパスでは学び得ないことである。このようなカリキュラムを作成する際に、本プロジェクトで培う経験とノウハウは大きな糧となることが期待される。

付録 国際学会発表記録

2016年3月6日から10日の日程でカナダ・バンクーバー市で行われた第60回比較国際教育学会 (The 60th Comparative and International Education Conference) において本プロジェクトに関する研究成果を口頭発表した。発表登録の際に作成した抄録を下記に示す。

Title: Promoting cultural and language education for international students through a Japanese traditional festival.

Authors: Motoharu Takao, Yukari Saiki, Tomoe Nishiyama, Tomoko Ozeki

Affiliation: Department of Human and Information Science, Tokai University
International Education Center, Tokai University

More than ten thousand international students enter Japanese language schools to learn Japanese language in Japan every year (<http://www.jasso.go.jp/about/documents/katosanae.pdf>). These schools are run by the universities and the private schools. The schools typically provide Japanese language programs to international students for one or two years. They usually learn standard Japanese only in the classrooms and the extracurricular programs on the campuses.

Language has an inseparable tie with cultures. The international students are required to learn Japanese cultures as well as language. In most of schools, however, the international students learn Japanese cultures only through textbooks, videotapes, and guided tours. They seldom have chance to learn Japanese language and cultures in local communities in which the schools are located.

Japan has various cultural traditions. The most significant local traditions which are well culturally preserved are the festivals, especially a Mikoshi parading. In this study, we provided the international students a program in which they help and participate in the Mikoshi parading as young residents in the community in the area where our university is located. In this program, they work and communicate with elderly residents, whereby promoting cultural and language education in the local community. The international students are expected to experience and learn Japanese way of communication, manners, conventions, traditions and Japanese traditional religion in the program, as well as contribute to the preservation of

Japanese local traditional cultures. This is a living education in a traditional festival.

Mikoshi parading, a parading with a divine palanquin, is the most popular traditional festival in Japan. The Mikoshi is believed to be a palanquin on which Japanese polytheistic Gods sit, although the paper talisman is actually regarded as a unified spirit of Gods. It is very heavy (more than 500 kg) and beautifully decorated with golden ornaments. The Mikoshi parading dates back to 749 A.D. in Kyushu, a western island of Japan, and became popular as a local festival all over Japan till 1300s A.D..

Traditionally, the Mikoshi parading has been prepared only by Ujiko members, the local residents who believe to be blessed by Japanese polytheistic Gods in a local Shinto shrine, for one month prior to the festival, and typically performed for one or two days. During the Mikoshi parading, Gods are thought to watch the life circumstances of Ujiko members, and bless the spectators. The heavy Mikoshi is usually carried by many Ujiko members all day long.

In the preparing processes, young Ujiko members could have learnt local cultures, traditions, manners, conventions, and philosophy of Shinto religion, the Japanese traditional polytheistic religion, from the elderly in Japanese local history. In a sense, Mikoshi parading had been functioning as a cultural inheritance system in local communities for many centuries. Unfortunately, young Japanese residents do not tend to hope to become Ujiko members and lose interest in Mikoshi parading for these last few decades. Therefore most of Ujiko members are currently the elderly people. Non-Ujiko members and even non-believer of Shinto religion can be involved in it now.

Owing to such policy changes, the international students can join the Mikoshi parading as non-Ujiko members. Moreover, non-religious Mikoshi parading are performed in some big festivals which are organized by local governments or industrial associations in big cities every year. A Mikoshi is not holy if it lacks a talisman as in these parading. On these occasions, the international students who hesitate to participate in pagan festival may be able to be involved in the Mikoshi parading.

The educational effects will be evaluated based on the interviews with international students and Ujiko members. Although this study is still being performed, the student participants reported that they could have invaluable cultural experiences and learn various Japanese traditional phrases which cannot be learned in the classroom, and Ujiko members could have a great time to

communicate with foreign young people and teach them their proud cultural traditions. On the day of presentation, we will introduce the conclusive results.



本研究は、2015年度 To-Collabo プログラム「地域志向教育研究経費」の補助を受け行われました。